みんなと倶楽部

My hometown Kaketsuka

MINNATO CLUB 掛塚 ESTD.2016

第４号

P1　竜洋西小3年生 郷土学習
P2　旧津倉邸探訪 其の四
P3　行って来たにぃ「半田・常滑を訪ねる」
P4　ちょっといーけ？ 伊藤勝男さん（東町） 平野芳子さん（大当町）

1/25

竜洋西小3年生 郷土学習

旧津倉家で「むかしのくらし」について学習

磐田市立竜洋西小学校3年生の郷土学習会が掛塚の旧津倉家住宅で開かれ、私たち「みんなと倶楽部 掛塚」もガイド役として参加しました。3クラスの児童100人ほどが参加した学習会のテーマは「むかしのくらし」です。

近頃では、残念ながら襖や障子で間仕切られた日本の伝統家屋は失われつつありますが、廻船問屋だった津倉家の住宅は、明治22年（1889）築の古民家。児童たちには1クラスずつ分かれて畳の上に座り、当会会長でもある池田藤平さんが持ってきてくれた昔の灯りのロウソク立てやランプ、暖房器具の火鉢や掘りごたつなど、今では珍しくなった道具にふれながら昔の暮らしについて話を聴いていただきました。

掛塚が昔は湊町だったことは、西小の校章に錨と波がデザインされ、校歌には「♪大海さして勇ましく」と歌われていますので、児童たちはみんな知っているはず。天竜川を材木が流されて来て、その材木を柱や板に挽いて船に積み込み、今の東京へと運び出したこと。そして、そんな掛塚には腕の良い職人が大勢育ち、「掛塚まつり」の屋台も地元の職人たちが技の粋を集めて造り上げたもの。

そんな歴史を持つ故郷を、誇らしく感じて成長してほしい、との気持ちを込めて解説に当たりました。

記事　斉藤朋之

参加した竜洋西小学生の感想

○次号でも紹介します！

先日は、つくらていを見学させてくれてありがとうございました。見学をさせてくれたおかげで、私は昔のことをしらべることがすきになって、昔のことがもっとすきになりました。昔のくらしや、昔の家のことや、つくらていはかいせんどんやだったことなどを教えていただき、ありがとうございました。

げんかんのだんがたかくなっていて、さいしょはなんでかなと思いましたが、名倉さんのおはなしをきいていると、みずがこないようにするためだときき、びっくりしました。洋間にいけなかったことがざんねんでした。次にいくきかいがあればいきたいです。

3年1組　太田ゆいか

1月25日はおいそがしい中ありがとうございました。わたしはつくらていを見学しておどろいたことが2つあります。1つ目は、茶室がどの部屋よりもせまくて、小さかったことです。入ってみた時、すごくせまかったのでなにをする部屋なのかなと思いました。でも、とてもおちつく部屋でした。2つ目は、大黒柱です。はじめて見ました。とっても太くて2階までつながっていると聞いたのでまた、びっくりしました。ふだん、入ることができないところに入ることができてよかったです。また、せつ明もとても分かりやすかったです。

3年1組　すず木なお

ちょっといーけ？

温故知新！ 掛塚を知る「にーさ・ねーさ」の方々に、掛塚生まれの主婦二人組（のりこ＆さゆり）がインタビュー。

今回は、東町の伊藤勝男さんと大当町の平野芳子さんをインタビュー。

伊藤勝男さん 81歳（東町）

Q ご出身と当時の掛塚の様子を教えてください。

磐田市見附です。昭和33年に静かなところに住みたいという母の希望で蟹町へ越してきました。結婚して2年ほど遠州浜へ出ましたが昭和44年（34歳の頃）に東町へ家を建て掛塚に戻ってきました。

あの頃は色んなお店があって、とても活気がありましたね。大当のお風呂屋へも行きましたし、木村屋のラーメンも美味くてよく食べました。郵便局（旧）のあたりに山一証券の社員寮があって、毎朝同じバスに乗って浜松まで行きましたよ。いい背広にトレンチコートを着て経済新聞を読みながら・・・。その姿がカッコよくて羨ましかったですね。

Q 医療機関で働くようになったきっかけは？（遠州総合病院の事務職）

就職難で悩んだ末に受けた面接の時に「小中高と野球をやっていた」と言ったら野球好きな院長から「明日から来なさい！」と言われて、翌日にはユニフォームを渡されグランドに連れて行かれたんだよ。働きながら大学受験の勉強をするつもりだったけど、寮生活で看護婦さんにも良くしてもらったし、医師にもかわいがってもらって・・・。周りの人の温かさに青春を謳歌して受験どころじゃなくなりました。（笑）

Q 以前に書かれた手記を拝見しました。当時の事を教えてください。

40年以上医療機関でメディカルソーシャルワーカーや医務課・人事課で患者さんや病院で働く人たちの為に働き、やりがいを感じてきました。定年後にも地域の自治会や福祉活動に携わることでたくさんの経験をさせてもらいました。そんな中、平成18年に「鬱病」を患ってしまいました。不眠や憂鬱や腸などの身体への異変が起きて、世間が嫌になり外に出たくない、人にも会いたくない、何度も自分で命を断とうと思いました。寝たきりで家族のする事なす事にイライラして声を上げたり・・・。

Q 病気を克服して元気をとり戻せたのはどうしてですか？

娘の勧めで心療内科を受診して「森田療法」を始めました。毎日の行動を日記に書くのですが、当初は行動がないから3行ぐらいしか書けなかったんです。週に一度、日記を提出して医師と話す。この繰り返しと毎日「ウォーキング一万歩」を実行して行く内に家事や洗車や盆栽などと行動出来るようになって日記の行数も増えていきました。完治するまでには4年半もかかりましたよ。闘病中は杖をつき、家内に手を引かれて近所を散歩をした事もありましたが、現在は全く健康に恵まれ、白寿園の苦情処理委員をしながら盆栽や週3回の「グランドゴルフ」を楽しんでいます。闘病中支えてくれた家族には感謝しています。

病歴につきまして、現在同じように心の病気で苦しんでいる方に元気を取り戻していただきたいという勝男さんの想いもあり、ご本人の同意の上記事として掲載させていただきました。○写真は昭和60年に視察旅行に行かれた際、当時の皇太子・同妃両殿下が偶然コペンハーゲンのお城から馬車で出てこられた時の貴重な写真と、愛犬のロン君が勝男さんのハーモニカに合わせて大好きな「第九」を歌っている写真です。（by のりこ）

平野芳子さん 81歳（大当町）

Q 子供の頃に遊んだ思い出や掛塚の町の様子を教えて下さい

私は中町に住んでいたから子供の頃は砂町の人ともよく陣取りやかくれんぼをして遊びました。当時は車も通らないし自転車さえなかった頃だから、上級生から下級生まで男の人もみんな一緒に、道を好きなように跳び回ってました。夏には近所の家の前に縁台が出てね、夕方になると子供達もみんなそこで座ってべちゃべちゃ話をしてました。150号線がなかった頃は貴船神社の入口あたりにバスの車庫があって、そこから少し北に戻って初寿司さんのあたりから木の橋を渡って浜松行きのバスが出たの。福田行きは、掛塚の商店街を通って、正木屋さんを曲がって白羽神社の方を通っていました。

Q 商店街に下駄屋さんも多かったみたいですが、よく下駄を履いたのですか？

あの頃はまだ着物が多かったから皆んな下駄だったの。洋服を着ていても下駄だったし、冬も別珍とか赤い足袋に下駄だったのね。正木屋さんには素敵な下駄を売ってたのよ。

Q 横町にあった帝国館劇場には行ったことがありますか？

掛塚の人たちはみんな、楽しみに観に行ったと思います。場所取りのお布団を持って並んで・・・。フジとかタカマツとかいう歌劇団が来た時は凄い人が集まって、二階が人の重みで落ちそうになったって話を聞いた事があるわ。学校でも「路傍の石」という映画を見に連れて行ってくれたのを覚えています。

Q お祭りの思い出を教えて下さい

屋台に乗る時は脱いだ下駄を後ろの下駄箱に入れて、座布団で場所取りをしたのよ。昔の男の子はみんな坊主だったけど女の子は髪の毛が天幕に付くと汚れると言われて、日曜日しか本舞台に乗せてもらえなかったのよ。御仮宮からの帰りに屋台の上で寝てしまって、朝目を覚ますと横町の通りでした。（笑）この写真（左下）は主人と篠島さん。昔は母親の羽二重とかちりめんとかの着物を潰して刺繍を入れて法被を作ったの。大当町に刺繍をしてくれる方がいて大当の天幕の修理もしてくれたのよ。

○舗装前の堤防の砂利道

Q 戦時中のお話を聞かせてください。

夜は部屋が明るいと敵機に見つかって爆弾を落とされるから、普段から電器に布を被せて暗くしていましたね。小学校へは集団登校で分団長を先頭に救急袋を背負い、防空頭巾を持って、行き帰りに通り道の貴船神社で「武運長久を祈る」とみんなで並んで祈りました。今思うと生きた心地がしない時代でしたね。

初めて聞くお話がたくさんありましたが、すみれ遊園地が昔は池で船着場だったというのには驚きました。お話の中に出てくる掛塚の商店街や劇場の様子、当時の人達の生活を想像してワクワクしながらお話を伺いました。現在は近しい人達とお喋りをしたり、おつかいに出かけたりと毎日楽しく過ごされています。

（by のりこ＆さゆり）

みんなと倶楽部 My hometown Kaketsuka

MINNATO CLUB 掛塚 ESTD.2016

●会　長　池田藤平
●事務局　名倉慎一郎、大沢利行、佐藤喜好
●編　集　靏田茂巳、山内紀子、鈴木小百合

お問い合せ
ご興味のある方は
下記までご連絡ください！
☎0538-66-4775（名倉）

旧津倉邸で使用されているガラス

津倉家住宅のガラスと言えば、洋間に使われたチェコ製のボヘミアグラスが注目されていますが、それ以外の障子や窓に嵌められた板ガラスにも時代の最先端を感じさせる技術が詰め込まれているようです。

結霜ガラス

明治22年（1889）築の旧津倉家住宅では、当時まだ一般的ではなかった板ガラスが各所に使われています。多くは、透明ガラスやすりガラスですが、数ヵ所に結霜（けっそう）ガラスと呼ばれる霜のような模様が浮き上がったレトロなガラスが使われています。

この不思議な模様は、粗く加工したガラス表面に膠（にかわ）などを塗って乾燥させ、その収縮力でガラス表面を剥ぎ取ることによって作り出されます。それだけか、と言われれば、それだけですが、その工程を経ることで、ガラスの表面に霜のような美しい模様が浮かび上がって来るのだそうです。

結霜ガラスは、明治後期から昭和初期にかけて特に人気のあった装飾ガラス。ガラス1枚をとっても、津倉家には当時の最先端のものが使われたというわけです。

旧津倉家住宅のガラスに興味津々。すべてのガラスが住宅建築当時（1889）のものであるのかは不明ですが、建具が当時のものだとすれば、ガラスが嵌められていたことは確かだと思われます。

旧津倉邸探訪・・・其の四

ぼかしガラス

1階土間に面した居間のガラスは、下のつや消し部分から上の透明部分との境目にグラデーションがかかり、うっすらぼかしてあります。

擦りガラスに使われるサンドブラストの機械が輸入されたのは、明治30年（1897）頃とのこと。このぼかしガラスはその後に作られたものか？あるいは舶来ガラスだったのか？サンドブラストではなくて、エッチングによるものか？

額入り障子

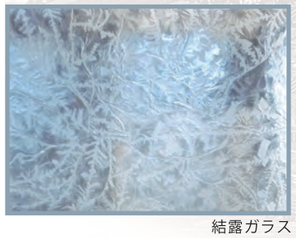
障子の中央に額縁のようにガラスを入れたものを「額入り障子」と呼びます。旧津倉家住宅の障子は同じデザインではありませんが、1階にも2階にも「額入り障子」がたくさん使われているのは驚きです。驚きと言うのは、津倉家住宅が建てられた明治22年（1889）頃には、国産の板ガラスの工場生産は行われてはいないようなのです。

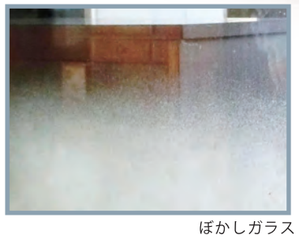
三菱財閥2代目当主岩崎弥之助の次男、岩崎俊弥が旭硝子を設立したのが明治40年（1907）。当時板ガラス先進国であったベルギーの手吹き円筒法の技術を導入して板ガラスの生産を開始したのは同42年（1909）のこと。

・・・となると、津倉家住宅で見られるガラスは、舶来ガラスであったか、一点物のどちらか。いずれにしても、大変高価なガラスだったことになります。

しかも、ガラスの周囲が「紐抜き」と呼ばれる額縁のようなつや消しになっています。このつや消しにしても、当時はまだサンドブラストによる擦りではなく、薬品を使ったエッチング法だったのかも知れません。

記事　斉藤朋之


結露ガラス


ぼかしガラス

額入り障子

行って来たにい

「尾張の湊町、半田・常滑を訪ねて」

旧廻船問屋・津倉家住宅の活用を考える参考にしようと出かけたのは、掛塚と同じくかつて湊町として栄えた愛知県の半田市と常滑市。半田では海運業・醸造業で栄えた旧中埜半六邸、常滑ではやはり廻船問屋だった旧瀧田家を見学しました。

旧中埜半六邸は、江戸時代後期から明治初期に海運業や醸造業で富を築いた豪商、中埜半六氏の家。NPO法人「半六コラボ」代表・杉浦明巳さんによれば、旧中埜半六邸が現在のように活用されるようになったのは、一昨年（2015）11月から。無住となり門が閉ざされたまま25年間放置され、荒れ放題だった半六邸は平成21年（2009）半田市が購入したのですが、耐震補修に多額の費用がかかるという理由で、一度は取り壊しが決定されていたのです。

取り壊しに待ったをかけたのは「半六邸の利活用を考える会」。取り壊し反対の署名を集めて市へ提出。一般市民のほか地元企業や高校などと力を合わせることで、半六邸の整備改修工事や利活用に対する具体的なプランを公表し、寄付金を募集しました。

その活動が評価され、半田市は建物の維持管理や一部を賃貸して運用することを条件に「半六コラボ」へと無償譲渡することを決定。半六邸の取り壊し撤回が公表されたのは、平成24年（2012）8月のこと。現在では、半田市の観光スポットとして観光客を集めています。

常滑市の瀧田家も旧津倉家同様、かつての廻船問屋。住宅は幕末の嘉永3年（1850）頃の建築を復元・整備したもので、公開が始まったのは平成12年（2000）。主屋、土蔵、離れが常滑市の有形文化財に指定されています。

常滑の町は細く曲がりくねった坂道が多く、土管などの陶器の廃材を利用した装飾を兼ねた滑り止めや土留めが独特の雰囲気を醸し出している人気のウォーキングスポット。そんな町を巡る「やきもの散歩道」を歩けば、陶器づくりの歴史を感じさせるレンガ造りの煙突や窯、黒塀の工場などと、次々と出会います。

常滑で陶器づくりが盛んになったのには、いくつかの好条件の重なりがありました。先ずは常滑層群から陶芸に相応しい粘土が採取できたこと。また、周辺には窯で火を焚く薪があったことも大切な条件。

さらに、出来上がった陶器を運搬する手段として、伊勢湾に面した港に船を着けることができたことも忘れてはいけない要因です。逆に言えば、船を着けることができたとしても運搬するものがなければ、瀧田家のように廻船業で繁栄することなどあり得ません。

酢・味噌・醤油や酒類を運び出した半田の旧中埜半六邸でも確認したこれらの条件は、北遠の良材を運び出すため、天竜川の河口に港が出来た掛塚と大変よく似ています。常滑で見た赤レンガの窯跡が、掛塚では伊豆石の蔵や石塀に代わるだけ。掛塚にも日本中に発信できる歴史と伝統があるのです。

記事　斉藤朋之